

# 「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のビリーフ

—PAC 分析の結果から—

Novice Chinese Japanese-Language Teachers' Beliefs on "Good Japanese-Language Teachers" :  
Based on a Survey by PAC Analysis

坪根 由香里\* ・ 嶽 肩 志 江\*\*  
小澤 伊久美\*\*\* ・ 八 田 直 美\*\*\*\*

TSUBONE Yukari ・ TAKEGATA Yukie ・ OZAWA Ikumi ・ HATTA Naomi

This paper analyzes Teachers' Beliefs on "good Japanese-language teachers" using PAC analysis datum of five novice (equal to or less than one year experience) Chinese Japanese-language teachers. It discusses how "Educational Guidelines" of China are reflected in their beliefs. The findings are : 1) awareness of basic knowledge of Japanese language is common, and as for the acquisition of four skills, a strong tendency toward conversation, especially on pronunciation, is seen ; 2) abilities to use language in practice or creatively are not strongly conceived ; 3) they refer to China-Japan relations and consider social and cultural knowledge to be necessary, but they view this knowledge as one to motivate learning.

キーワード：ノンネイティブ日本語教師 (non-native Japanese-language teachers), 中国人教師 (Chinese teachers), 新人教師 (novice teachers), ビリーフ (beliefs), PAC 分析 (PAC analysis)

## 1. はじめに

国際交流基金 (2013) の 2012 年度日本語教育機関調査によると、中国では 2009 年調査時と比べ、日本語教育機関数、教師数、学習者数のすべてにおいて伸びを見せ、学習者数は 1,046,490 人 (26.5% 増) と 100 万人の大台を超え、全世界で第 1 位になったという。高等教育機関における日本語教師数は、中国人教師 (以下、CT) 約 9,800 人、日本語母語教師 (以下、NT) 約 1,500 人で、NT は、割合は高くないが (13.0%)、人数では世界で最も多い。その結果として、中国の大学において NT が CT と協働する機会も多いということになる。一方、日本学生支援機構による 2013 年度の調査による

と、日本国内の留学生のうち、中国からの留学生数は若干減少してはいるものの、81,884 人と最も多い。このように、中国で CT と協働する NT や、日本国内において中国人留学生と接する NT は多くいる。したがって、中国においては NT と CT のよりよい協働のため、日本国内においては留学生の送り出し側の意識を理解するために、CT のビリーフ<sup>1)</sup>を把握することの意義は大きいであろう。

中国における高等教育は、王 (2008) によると、1990 年以降大きく転換しており、教育理念は「知識重視」から「創造性、実践能力と創造能力重視」へと変わったという。中国の大学における日本語教育は、「教学大綱」によって規定されている。基礎段階 (第 1・2 学年) は 1990 年 6 月、高学年段階 (第 3・4 学年) は 2000 年 3

\*大阪観光大学観光学部    \*\*横浜国立大学国際教育センター・教育人間科学部  
\*\*\*国際基督教大学日本語教育課程    \*\*\*\*国際交流基金ジャカルタ日本文化センター

月に制定され、基礎段階の「教学大綱」は2001年に改定された(于2002、王2012)。王(2012)によると、基礎段階の「教学大綱」は、「学生に日本語の基礎知識を着実に身につけさせ、聴く・話す・読む・書くの基本的な技能を訓練し、実際に言語を運用する能力を養い、学生の日本の社会と文化に関する知識を豊富にして文化を理解する能力を育成」する、「対象国の文化に関する知識は、異文化コミュニケーション能力の基本的内容の一つであり、言語の規則と密接に関連している」とあり、言語能力と共に異文化コミュニケーション能力を育成することを規定しているという。学生の言語によるコミュニケーション能力を重視することが明確に規定されたのは初めてで、従来の文法中心の日本語教育を改善する意義を持つ(于2002)。高学年段階の「教学大綱」では、コミュニケーション能力を高めること、日本の社会・文化に関する知識を充実させることを要求している(于2002、王2012)。

また、シラバスの執行状況を検査し、全国の日本語専攻学生の教育水準を把握し、高めることを目的として、全国の日本語専攻の大学2年生、4年生を対象に「大学専攻日語四級考試」「大学専攻日語八級考試」という統一試験が実施されている。この考試には聴力、読解、作文、翻訳の試験が含まれている(譚2004)。また、譚(2004)によると、シラバスには「基礎段階の授業に、優れた言語の基礎のあり(ママ)、経験豊かな教師を担当させ、常に学生を補修する」とあり、高学年段階の講義は多くの専門知識を持ち、日本語能力の高い教師を必要とするという。さらに、時代の発展につれて、マルチメディア等の利用も求められるようになってきている。そのため、教師育成や教師研修は極めて重要だと譚は述べている。一方で、王(2008)によると、教師に対する評価は教授の質よりも研究業績に重きを置くようになり、教師が研究業績に追われ、授業軽視、授業離れという深刻な現象が生まれたという。

このような1990年以降の日本語教育を取り巻く様々な変化の中、中国において、CTはどのような意識で教授活動をしているのであろうか。特に、制度上の転換後に日本語教師になった新人教師は、どのようなピリーフを持っているのであろうか。

筆者らは、日本語を母語としない日本語教師(以下、NNT)とNTの協働や教師研修に資する知見を提供することを目的として、タイ、韓国、中国の大学で日本語を教えるNNTのピリーフを質的・量的両面から探る一連の研究に取り組んできた。本稿では、そのうち、中国

人新人日本語教師(教歴1年以下)5名を対象とした質的調査の結果について報告する。

## 2. 先行研究

大学で教えるCTを対象とした教師の意識に関する研究は、数は多くないが、量的研究、質的研究とも行われている。質問紙を用いた量的研究には、冷(2005)、長坂・木田(2011)がある。冷(2005)は、CT29人に質問紙調査を実施し、「総合日本語(精読)」の教室活動に対する教師の意識を調査した。その結果、「文法の説明」「本文の説明」「単語の説明」「文法の練習」等の言語知識の説明や知識の定着のための教授活動が中心に行われ、それらを教師も学習者も役に立つ教授活動として評価していること、もっと時間をかけたい教授活動として「教科書以外の応用会話練習」があるが、よく行うのは「3分間スピーチ」「問答練習」であり、「討論」等の創造性の高いコミュニケーション練習は行われていない場合が多いことを明らかにしている。長坂・木田(2011)は、CT85名を対象として、会話力向上のための指導に関する質問紙調査を行い、教室の中では、伝統的な繰り返し、暗記、中国語への翻訳といった自由度の低い活動が頻繁に行われていること、意見や感想を述べたり説明や描写を学習者が行ったりする自由度の高い活動は、会話力育成に貢献すると評価されているものの実施率が低いことを指摘し、中国の日本語教育が伝統的な教え方から脱却していない状況を示している。その上で、意識と実践のずれの要因として、教師が会話の授業や指導の方法に困難を感じていることを挙げている。

一方、質的研究には、浜田(2010)、森脇他(2012)、坪根他(2014)がある。浜田(2010)は、よい言語教師に関するエピソード・インタビューを実施し、中国の大学で教えている教師6名に「自分が日本語を教える時にどのようなことを重視しているか」「よい言語教師とはどのような人か」という質問を提示して一人あたり30~40分のエピソード・インタビューを実施している。その結果、その6名の中国人教師は、「こうあるべき」という行為のモデルに沿って行われ、緊張を強いる「規範的モード」と、個人の感情や状況判断に基づく行為で、緊張から解放する「表現的モード」の間でうまくバランスを取りながらコミュニケーションのモードを選択し、教育していると述べている。つまり、教科書に沿った規範的枠組みでテストによって緊張を与えるような形と、学習者と教師とのコミュニケーションや学習者の内

発的動機づけを重視する形を選択しつつ教育を行っているということである。森脇他 (2012) は熟練中国人教師 1 名に対してライフストーリーアプローチを行い、この教師が、全体への指導を行いながらも、個々の学生の理解の仕方や学習状況に対して、常にアンテナをはり、応答を行う「二重の応答性」を身につけたのは過去の挫折体験や日々の反省的思考によるものである可能性があるとしている。教歴 15 年以上の中国人経験日本語教師を対象に PAC 分析を行った坪根他 (2014) では、経験 CT は、①ほめたり励ましたりし、思いやりを持って学習者の立場に立ち、質問しやすい雰囲気作りをしようとしていること、②教師と学習者が対等で共に学び合う授業を目指していることを示している。

しかし、新人教師に絞っての質的研究は、管見の限り見当たらない。そこで本稿では、新人 CT 5 名に対する「いい日本語教師」に関する PAC (Personal Attitude Construct) 分析の結果を示し、新人 CT が持つピリーフの特徴について考察する。

### 3. 調査の概要

#### (1) 調査協力者

本調査は、日本語の主専攻を持つ中国の大学で常勤として日本語を教えている経験 1 年以下の新人 CT 5 名を対象としている (表-1)。対象者は、地域・所属大学が 1 箇所集中することのないように選んだ。教師 D 以外は日本で修士または博士の学位を取得、教師 D は中国の大学院時代に 1 年間日本に留学している<sup>2)</sup>。

表-1 調査協力者一覧

協力者	年齢 (歳)	性別	日本語教育歴	日本留学歴
教師 A	26~30	女	7ヶ月	4年4ヶ月
教師 B	26~30	女	6ヶ月	5年6ヶ月
教師 C	36~40	女	6ヶ月	6年
教師 D	26~30	女	6ヶ月	1年
教師 E	31~35	女	1年	8年4ヶ月

#### (2) 調査方法

調査は内藤 (2002) に従い、2011 年 2 月~8 月に PAC 分析を実施した (手順の詳細は坪根・小澤・八田 (2013) を参照のこと)。自由連想を引き出す刺激文 (日本語) は以下の通りである。刺激文は、単に授業中の教師の態度・行動等について尋ねるだけでなく、授業外の学習者への配慮や同僚との関わりなども含め、幅広

く様々な側面を想起してもらうことを意図して作成された。日本語非母語話者であることを考慮し、連想語記入の際は、辞書の使用も可とした。5 名中 2 名が辞書を使用している。

あなたにとって「いい中国人日本語教師」とはどんな教師ですか。その教師は教室内外でどんな振る舞いをすると思いますか。また、あなたは、その教師に対してどんな気持ちを持つでしょうか。それから、その教師は日本語教育についてどんなことを考えていると思いますか。

そういったことを含めてあなたが「いい日本語教師」という言葉を聞いて思い浮かべるキーワードやイメージを自由に書いてください。

キーワードやイメージは、できるだけ単語で、書いてください。ただし、それが難しい場合はもう少し長く (10 字前後ぐらいまで) なくても構いません。

非類似度評定の結果<sup>3)</sup>をクラスター分析 (距離、ウォード法、HALBAU7 使用) して得られたデンドログラムを協力者に示し、インタビュー<sup>4)</sup>を行った。

### 4. 結果と考察

#### (1) 協力者別の分析

クラスター分析の結果得られた各教師のデンドログラムを図 1 から図 5 に示す。クラスター (CL) の区切り方は、インタビューの初めに各教師に提案し、確認を取っている。なお、図中の各 CL に付けた名前は調査者によるもので、以下の本文中の協力者の名付けとは異なるものもある。(以下、斜体箇所はインタビューからの引用。言い淀みは省略する。)

##### 1) 教師 A の事例

教師 A のデンドログラムは 4 つの CL に分けられる (図 1)。CL1 は〈日本語が上手〉から〈羨しい〉までの 4 項目で、教師 A は「日本語の能力」と名付けた。教師 A は、この CL は教師の能力についてで、「生徒にとっては、日本語の先生が日本語がとても上手で発音がきれいで流暢に日本語を話せるということを見て、生徒が羨ましいと思う。」と述べ、文法力、語彙力があり、母語との違いがきちんと説明できること、伝えたいことをきちんと流暢に話せる能力が必要だという。また〈流暢〉には、中国語でうまく説明できることも含むとした。この CL の項目を書く時は、大学時代の恩師をイメージしたと述べ、「暗唱したのは、やっぱり日本語の語感が育たれますね」と、学習者時代に教科書の暗記をさせられたことが役に立ったという意識から、自らも

暗唱を取り入れている。

CL2は〈おもしろい〉から〈活発〉までの3項目で教師Aは「授業を面白くする工夫」と名付け、一番重要なポイントだと述べた。このCLは教師の授業のやり方で、「生徒が面白く、楽しく、授業を受けるための、先生に対する要求」とした。教師は〈興味を持たせる〉ため、音楽、アニメ、漫画、映画を使ったり、学習者が日本語を話すチャンスを作るべきだと考えている。

CL3は〈異文化が理解できる〉から〈謙遜〉までの6項目で、教師Aは「異文化理解」と名付けた。日本語教師としては日本、日本語のことをどれだけ理解しているか、学習者に伝えられるかが大切であるとし、「日本にいて初めてわかったことを、生徒に話す時はとても興味深く聞いて」、納得してくれると述べている。また、中国では「正しい歴史観」は最も必要であり、その背景として、日本への負のイメージや感情を持つ中国人も少なくないため、もともと希望して日本語学部に入る学習者はほとんどおらず、「日本語学部に入るのは、人に言う時は、ちょっと言いにくい」ことである。そのため、入学した学習者には日本理解の重要性を訴え、そういった心理を乗り越えてもらわなければならないとしている<sup>5)</sup>。

CL4は〈責任感〉から〈公平〉までの7項目で、教師Aは「教師の態度」と名付けた。授業準備を真面目にし、学習者に対して、優しく丁寧に接し、特にできな

い学習者に対して励ます。一方、授業では暗唱させる時や、勉強しない学習者に対して厳しくすることが必要だと述べている。

教師Aは、いい日本語教師は学習者が羨ましいと思うような美しい発音、日本語の能力、説明するための中国語の力を持ち、学習者には優しく接し、学習者が面白いと感じる授業を目指している。学習方法に関しては「暗唱」の効果を強く信じており、教師は学習者に対して責任感を持って厳しくしたほうがよいとしている。また、自らの経験を学習者に伝えること、日中関係に関して「正しい歴史観」を持つことの必要性を語っていた。

2) 教師Bの事例

教師Bのデンドログラムは3つのCLに分けられる(図2)。CL1は〈日本好きの教師〉から〈中国にないものをよく発見できる〉までの6項目で、教師Bは「日本を発見する」と名付けた。このCLで教師Bは「日本語が好きじゃなければ自分の熱意も学生に伝えられないから、[中略]日本の文化とか社会の習慣とかを知って、日本が好きになって、初めて学生に自分の日本に対する好きな気持ちを伝えて、学生も日本語が、日本が好きになって[中略]日本語を頑張って勉強したいという気持ちにさせる」と述べ、まず教師が日本好きであることの必要性を訴えている。また、日本理解のためには日本滞在経験が必要であると述べている。さらに、自分をよく思ってもらえば他の中国人もよく思ってもらえ

【 クラスター分析 ---- 基準：ワード法 】

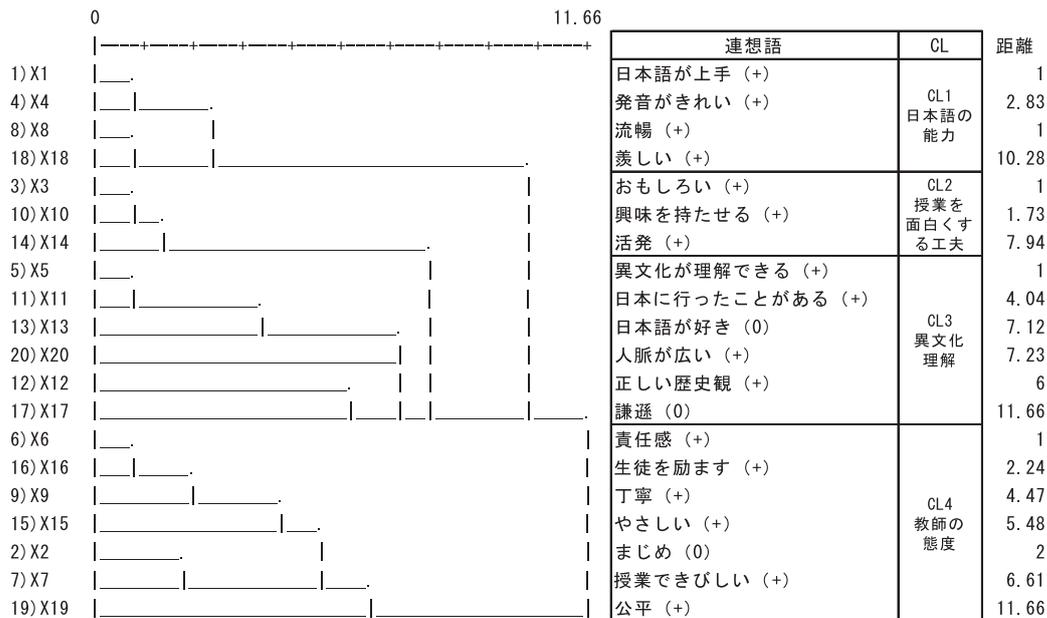


図1 教師Aのデンドログラム

る、マスコミの報道、政治的なことと人と人との交流は違う、と日中関係を意識したコメントも見られた。〈日本好きの教師〉は重要度順でも 1 位で、まず日本理解、日本への好意を持つことが重要だと意識しているところが特徴的である。

CL2 は〈教育に対する熱意を持つ〉から〈発音がきれい〉までの 6 項目で、教師 B は「熱意を学習者に伝える」と名付けた。教師 B は、熱意を持って、元気で活発な雰囲気面で面白く授業をすることを求め、教師が教師という仕事を好きで元気でないと学習者も元気にならない、授業が面白ければ学習者はその先生の授業を受けたいと思うと述べている。実際の授業では、「会話文の形式になっているんですけど、テキストが [中略] 感情をこめて、表情とかも生き生きして会話文を読んだほうが、学生もこれから言語を使う時に役に立つかなと思います」とし、会話形式のテキストを感情を込めて読むことで学習者が使う時に役に立つと考えている。また、文法を教える時は一方的に教えるのではなく、置き換え練習や翻訳、暗唱といった練習をさせている。発音については、「先生の発音がよいと、学生の発音もやっぱり学生は先生の発音を真似しますから、発音がきれいな先生の学生も発音がきれい」とし、きれいな発音は重要だと述べた。

CL3 は〈日中対照で文法を説明できる〉〈中国語レベルがいい〉〈学習者に誠実〉の 3 項目で、教師 B は「言葉で文法を説明する」と名付けた。教師 B は日本語を教える時の母語 (中国語) の位置づけについて、まず中国語で考えて日本語に訳すから中国語レベルが上がれば日本語のレベルも上がる、日本語と中国語の同じような言語表現を対照させて教えると学習者が早く覚えると述

べ、中国語の効果的な使用を意識している。〈学習者に誠実〉というのは、学習者に質問されてわからない時、メンツを守るためにわからないことも間違った説明をしたり、説明せずに覚えなさいと言うのではなく、調べて答えるということだという。

このように、教師 B は日本、日本人、日本語を好きであることの大切さを強く述べ、日本で得た様々な知識や経験を大切に思っていてそれを教育に生かそうという考えを持つ。その際に熱意をもって面白く教えることが重要だと思っている。教授方法としては、感情を込めて会話形式のテキストを読むこと、置き換え練習や翻訳、暗唱等の練習が挙げられていた。専門が日中対照であるためか、文法説明での日中対照の有効性を意識し、中国語力や発音がきれいであることが大切だとしている。

### 3) 教師 C の事例

教師 C のデンドログラムは 3 つの CL に分けられる (図 3)。CL1 は〈発音がきれい〉から〈自信〉までの 18 項目で、教師 C はこの CL を、授業をする時のスタイル、個人的な素質、学習者の教師に対する気持ちだとし、「私が好きな日本語の先生」と名付けた。授業をする時のスタイルは〈笑顔〉で、〈ユーモア〉を交え、〈いきいき〉して俳優のような感じで、学習者は教師の話の内容、全体的なイメージに魅かれるとしている。知識面では、「単にテキストの中の内容だけじゃないです。[中略] 幅広い知識必要ですね。[中略] 経済、日本の社会の知識、貿易など、いろんな面の知識が必要」であり、特に、文化に関する知識を持ち、それを面白く上手に教えることを求め、そのような教師は〈尊敬〉の対象となるという。しかし、いい授業というのは単に面白いだけではだめで、学習者が「何を勉強するか。また今後にと

【 クラスタ分析 ---- 基準：ワード法 】

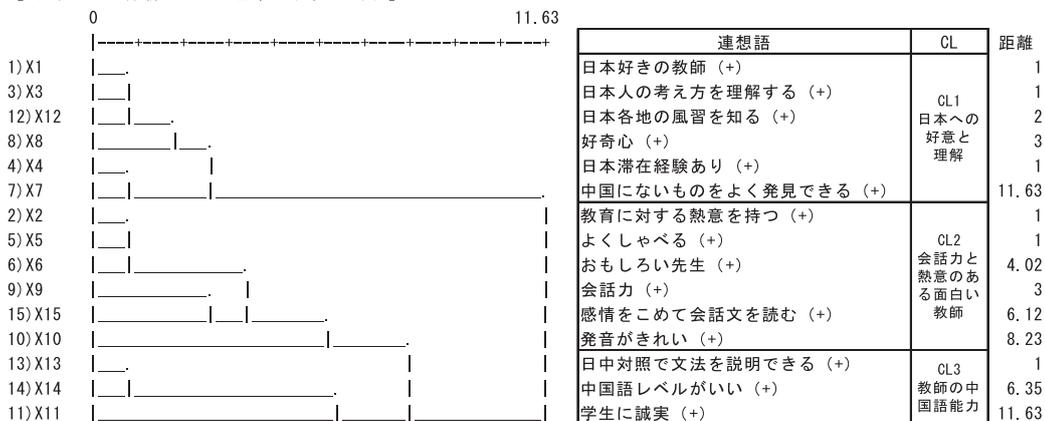


図 2 教師 B のデンドログラム

のように役立つかが大切だと考えている。そのためには、教師は学習者に適当にプレッシャーを与えて勉強の効果を確実に把握するのが重要だと語った。教師の資質では、特に発音に関して、日本人より中国人はもっと必要で、「能力すごく高いし、学歴も高いし、でも、もしいったん話したら、変な発音したら、もう信頼できない」と、その重要性を述べている。学習者はいい教師に会ったら〈感心〉して〈好き〉になり、そのような先生から〈指導をもらいたい〉と思うし、〈会いたい〉と思う、つまり教師には俳優やアイドルのようなところがあると述べている。

CL2は〈熱意〉から〈楽しい〉までの7項目で、教師Cは具体的に教えている態度、教え方でまとまっているとし、「教え方」と名付けた。実際の教え方については、〈わかりやすく〉するために具体的な〈例文〉や〈実物〉を準備し、学習者に合わせて教案を作成すること、学習者が何かを学べた、難しい内容が理解できたと感じるような「楽しい」授業をすることの必要性が述べられた。また、教師は教室内外で学習者に対して〈思いやり〉を持って接し、授業ではよく学習者を観察、授業外でもメールや電話で質問に答えるとしている。そし

て、教師として〈熱意〉は重要で、自分の仕事にやりがいを感じて熱意があれば学習者に伝えることができると述べている。

CL3は〈友達〉から〈国際社会〉までの6項目で、教師Cは「教師の使命」と名付けた。このCLでは大きく分けて、教師と学習者の関係と日中関係の2つについて語られた。前者については、クラスの中で成績のいい人も悪い人も〈公平〉に対応し、「他の人との差は感じられないように」すること、そして、悩んだこと、困ったことを相談したいと思われるような友達のような関係の教師になることが語られた。後者については、日本と中国が〈互いに理解〉すること、日本に対して誤解がある学習者もいるため、日本のよさを学習者に〈宣伝〉し、日本と中国の〈友好〉の懸け橋になることだと述べた。ただし、「日本社会の良さは[中略]一方的に良さを紹介したら、学生はほんとなかなー、ちょっと疑問」と感じるため、自分の経験した事実を客観的に伝え、学習者が自分で判断することが望ましいとしている。また、学習者は自分の国しか知らないため、「他の国の習慣とやったことを互いに尊重し理解できるように[中略]だから、学生さんに、もうちょっと広い目で、

【クラスター分析 --- 基準:ワード法】

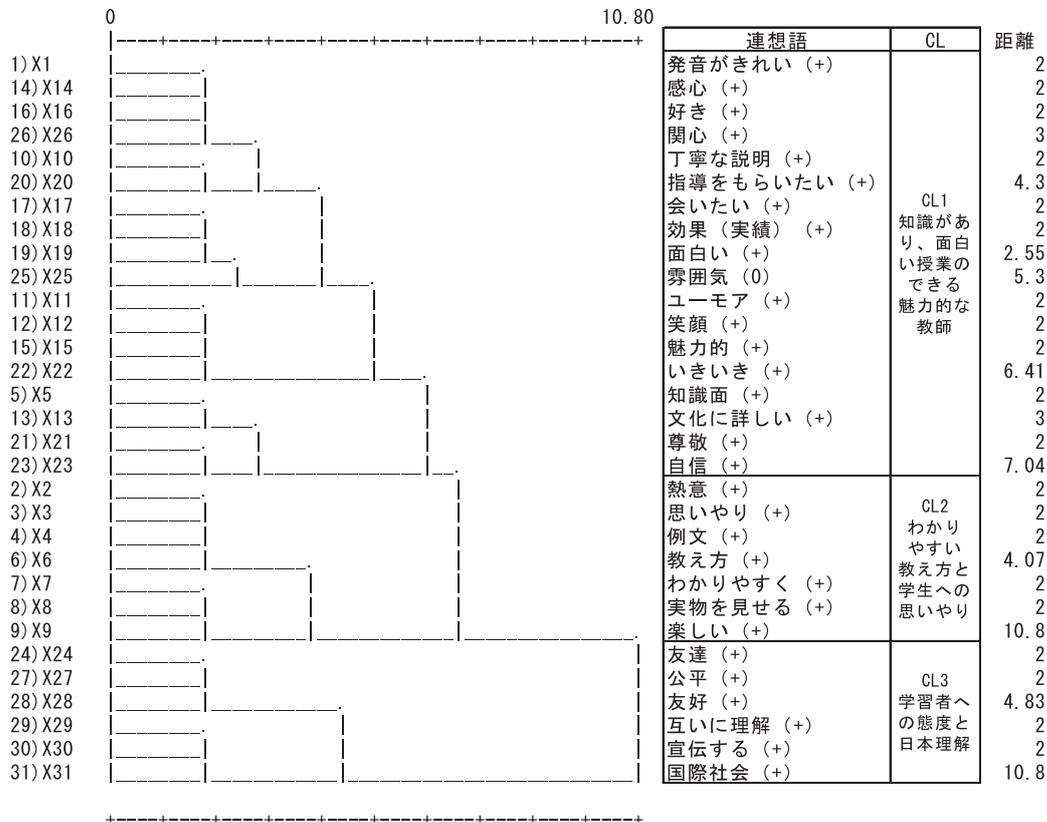


図3 教師Cのデンドログラム

もうちょっと広い視野で世界を見ればいいかなと思いきす」とし、〈国際社会〉を認識してほしいと願っている。

教師 C は、笑顔で生き生きとして、文化を始めとした幅広い知識を持ち、発音がきれいな教師は、俳優やアイドルのようなあこがれ、尊敬の対象だと捉え、それが学習者がこの先生から指導を受けたいという気持ちにつながって、動機づけになると考えている。また、授業をわかりやすく、楽しくする方策について意識している。さらに、教師が学習者と友達のような関係になること、教師が自分の経験を伝え、日本と中国の懸け橋になること、学習者が他国を理解して広い視野で見られるようにすることの重要性を強く感じている。

4) 教師 D の事例

教師 D のデンドログラムは 3 つの CL に分けられる (図 4)。CL1 は〈上手な日本語〉から〈中国をよく知っている〉までの 4 項目で、教師 D はこの CL を「基本」と名付けた。日本語教師だから〈上手な日本語〉は当たり前であり、日本文化を知らないと日本語は通じないので〈日本通〉であるべきだとした。〈上手な日本語〉には知識も含まれ、上手に説明できるような日本語の知識が必要であり、また、学習者は言葉遣いなど教師の真似をする場合が多いため、教師は発音がきれいで、日本語らしい日本語を流暢に話せたほうが良いと考えている。また、〈日本通〉の説明の中で教師 D は、学習者みんなが留学できるわけではないので、自分が見た日本を学習者に伝えたいと話し、「今の中国人は日本に対して、何かちょっと誤解するところもありますし、その誤解を解きたい」と、日中関係への意識についても語っていた。一方で、教師の中国語力や中国に関する知識も必要だと考えており、「初心者を教えてますが、日本語だけでは学生たちはわからないと思いますから、[中略]自分の中国語はまだまだだあって [中略]そして、中国

をよく知っていること、日本事情と中国事情を比べる時がありますから、中国がわからないと、うまくいかない」と述べている。

CL2 は〈友達〉から〈学生と一緒に成長する〉までの 3 項目で、教師 D はこの CL は教師と学習者の関係を表すとして「関係」と名付けた。「教師は学生の友達になつたらいい」と言い、「伝統的な教師は、私たち学生時代、神様みたいなもので [中略] 友達なら何でも話せるし、どんな質問でも遠慮なく聞いてくれます」と述べている。そして、教師は〈学生と一緒に成長する〉ために〈時代とともに進歩〉しなくてはいけないと述べた。教師は、新しいものを速いスピードで吸収している学習者を理解するために、自分も新しいものを吸収しなくてはならず、マルチメディアの使用、日本語や教え方の技術の向上などが必要だと語った。例えば、アニメ、ドラマなどの遊びの中から知識が身につくというように、楽しく教えるのがいいと考えている。

CL3 は〈勉強法を教える〉から〈建構主義〉までの 3 項目で、教師 D は「教授法」と名付けた。教師は日本語を勉強するいい方法を自分の経験から教え、学習者の今の段階にふさわしい文章、映画などの〈資料をすすめる〉とした。〈建構主義〉というのは「心理学の用語で、人はそれぞれ違う考え方持っていて、同じ知識に対しての理解も人によって違いますから、無理に学生たちにこうやって理解しろと言わない。学生の考えを大事にする」ことだとし、具体的な例から学習者自身が理解することが望ましく、教師はそれを導く役だと述べた。

教師 D は、5 名の中で唯一中国国内の大学院で学位を取得しており、日本留学経験は 1 年のみである。そのためか、自らに対する未熟意識が強く、自分も学習者と共に勉強しながら前に進んでいると感じている。また、教師と学習者は、遠慮の要らない友達のような関係

【 クラスタ分析 --- 基準：ワード法 】

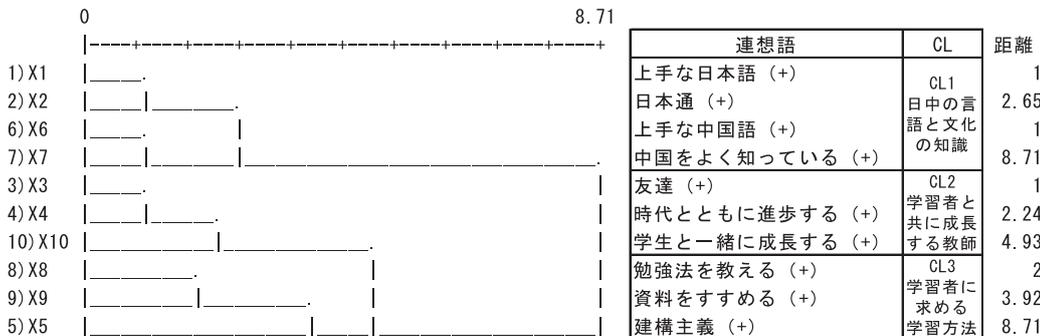


図 4 教師 D のデンドログラム

がいいと考えている。きれいな発音で流暢に話せる日本語力、日本文化の知識、中国語力、中国事情の知識が必要だとし、日中関係への意識も語りに表れていた。教師 D の語りの中では、「建構主義」という項目が特徴的で、学習者が自分で考えて理解することを求めている。

5) 教師 E の事例

教師 E のデンドログラムは 3 つの CL に分けられる (図 5)。CL1 は〈学生と一緒に生き方を考える教師〉から〈他人との学び合いの重要性について気づいてもらう教師〉までの 5 項目である。教師 E はこの CL を「一緒に考えて、考える活動の中で日本語が育つ」というイメージで、「考える」というのは、「まず学生同士が一緒に考えるというのがあって、その上で、教師はちょっとリードする感じなんですけれども、でも、教師も一緒に考えるっていう感じ」と述べ、「教師と学習者が共に学ぶ教室活動 (生き方とか考える力)」と名付けた。ここでは教室の中で教師と学生と一緒に深く考えるイメージを想起したとし、「今、中国どういう状況になっているのか [中略] 世界今どういう状況になっているのか、まず、一緒に調べて考えて話し合って、それがわかった上でこの世の中で自分はどういうふうにやっていきたいのか [中略] それぞれ意見を出したりして」、教師も一緒に考えていくというイメージだと述べた。〈社会の現状について一緒に学び、考える〉は、自分自身はできていないが、とても大事なことであり、今世界や中国がどうなっているのかという社会の状況をおさえた上で、自分の一つ一つの行動なども考えて判断して生き方を考える場を作ることが大事だとした。

CL2 は〈学習者の自律性を育てる教師〉と〈学習者

のさまざまな可能性を引き出せる教師〉の 2 項目で、教師 E は、CL1 は教室活動、CL2 は「学習者の能力を引き出すという感じ」と述べ、CL2 を「学生の可能性」と名付けた。「自律性」というのは、「勉強について自分でちゃんと計画して進めていくというのもあるんですけど、もう 1 つは [中略] 自分の人生を自分で計画して、生きていく、ちゃんと考えて生きていくという部分も自分でできるように育てることが大事」だとした。また、中国の学生は他人の話に関心のない人が多く、じっくり人の話を聞こうとしない印象があるが、他の人に関心を持って学び合ってほしいと考え、他の人との関わり合いを大事に育てる必要があると述べている。さらに、「同じ基準で学習者を要求するんじゃなくて、みんなそれぞれできることが違って来るから、[中略] 学習者が持っている可能性を引き出して伸ばすというのが大事」だと考えている。

CL3 は〈学習者の意欲を引き出せる教師〉から〈実践をよりよくするために研究を行うなど考えつづける教師〉までの 3 項目で、教師 E はこれまで 2 つの CL と異なり、CL3 は教師の学習者に対する態度で教師がメインであるとし、「教師の工夫、姿勢と内省」と名付けた。教師が自分でやりたいからやるのは意味がなく、学習者自身がやる意義を見出した上でやることが大事で、様々な方法を使って「学習者の意欲を引き出すことも大事」だと述べている。また、中国人教師の中には「自分が一番偉い、すごいきつい言い方で学生に命令するような感じで話している人が多くて、[中略] 多分、自分の権威守るため、〈中略〉そういうのはあまり好きじゃない」と述べ、教師は絶対的な立場でなく、学習者も

【 クラスタ分析 ---- 基準：ワード法 】

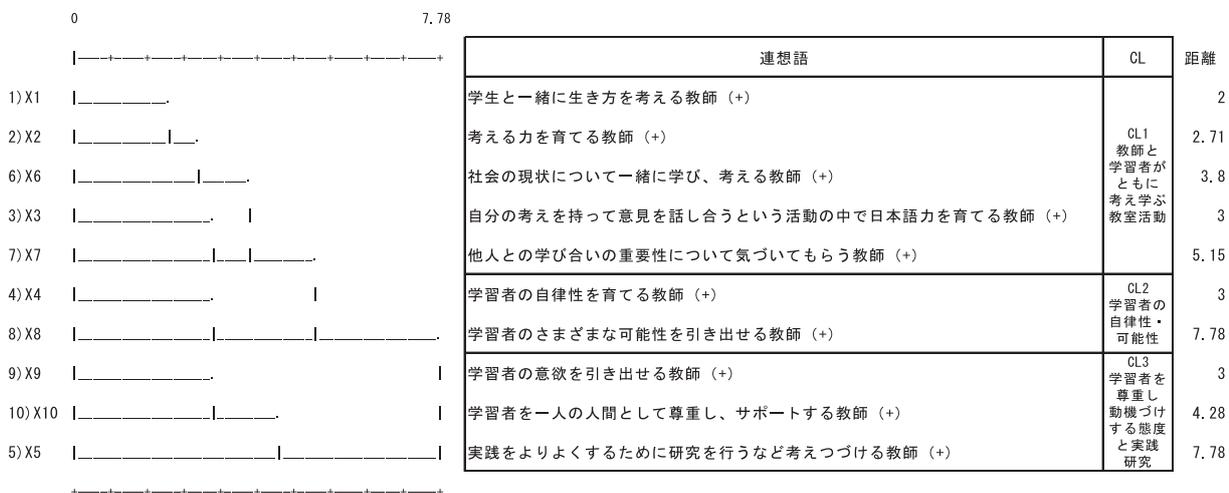


図 5 教師 E のデンドログラム

一人の人間として尊重し、サポートするべきであるとしている。さらに、「常に内省できる教師、今の実践をよりよくするためにどういうふうにするか、[中略] 研究を行って、教育、実践にまた返すとか、そういうことを考え続ける教師が大事」だと語った。

教師 E は、今の中国や世界の状況について学習者と共に考える、学習者の自律を目指す、学習者の意欲を引き出し、個々の学習者を尊重する、よりよい実践のために考え続ける、といったことを強く感じている。教師 E の語りは他の 4 名とは内容が大きく異なっているが、これは、教師 E のみが日本の大学院で日本語教育を専攻し、本人が述べているように、そこで受けた影響が強いためであろう。

しかし、教師 E は帰国後、日本語の正しさや知識を重視する中国の日本語教育を見て、人との協働、コミュニケーション等を重視する自分の考えとのギャップを感じている。また、中国では教師は絶対的で日本語をわかっている人という立場を守ろうとしており、学習者も教師から文法や単語を教えてもらいたいという意識が強いと述べ、グループ活動を取り入れた際に、「勉強した感じにならないから 1 文ずつ勉強したい」という要望があったという。教師 E はこうした状況の中、「厳しく管理したほうがいいのか、ある程度自由を与えて伸び伸びと一緒にやっていったほうがいいのか、ちょっとわからない。あと周りの先生たちの態度を見て、私もそうなるのかなとかちょっと心配したりして」と漏らしていた。

教師 A、B、C、D も、伝統的に行われてきた文法説明中心の授業でなく、それぞれが学習者にとって面白い授業とは何かを考えているが、教師 E は学習者の自律性や他者との学び合いにまで踏み込んでおり、教師と学習者の関係、学習者同士の関係の捉え方が他とは異なっている。しかし、教師 E は帰国後、自分とは異なる意識の教師が圧倒的に多く、そのような教師による教育を受けている学習者に対して教えるという状況の中で、自らのピリーフについて葛藤を覚えているようである。

## (2) 考察

前節では 5 名が考える「いい日本語教師」に関する PAC 分析の結果を個別に説明してきた。教師自身がどうあるべきかと学習者に求めるものは全く同じでない可能性もあるが、ここでは中国の日本語教育を規定している「教学大綱」の内容が、5 名の意識の中にどのように反映されているのかを考察してみる。

「教学大綱」では、学習者に対して、日本語の基礎知

識および聴く・話す・読む・書くの基本的な技能の習得、言語運用能力、社会・文化に関する知識、異文化コミュニケーション能力等を養うことが規定されている。まず、日本語の基礎知識と四技能の習得については、特に「知識」として連想語に挙げていたのは教師 C のみであったが、「日本語が上手」(教師 A、教師 D)の中には知識的なことも含まれていた。「日中対照で文法を説明」(教師 B)にも日本語の知識を得た上でそれを利用して教えるという意識が見られる。四技能の習得については、「日本語が上手」がそれを表すようではあるが、語りを詳細に見ると「日本語が上手」というのは会話能力の高さという認識が強く、中でも教師 E を除く 4 名が「発音のよさ」の必要性を述べていた。譚 (2004) によれば、シラバスでは教師の日本語能力の高さについても言及があるが、教師自身の技能についての意識には、偏りが見られた。

言語運用能力については、教師 E が「一緒に考えて、考える活動の中で日本語が育つ」としており、学習者の言語運用能力向上への意識が見られる。その他は、暗唱や会話形式のテキストを感情を込めて読むことが効果的だと言及があったが、冷 (2005) や長坂・木田 (2011) が述べているように、意見や感想を述べたり説明や描写を学習者が行ったりするような自由度・創造性の高い活動に対する意識は見られなかった。教育理念が「知識重視」から「創造性、実践能力と創造能力重視」へ変わったとされているが、「実践能力」は暗記したものの、教科書のものをそのまま使うことだと考えられており、「創造能力」が重視されている様子は認められない。

社会・文化に関する知識については、全員が何らかの言及をしていた。教師自身が日本の社会・文化について理解し、それを学習者に伝えることの必要性が強く語られ、特に、自らの日本滞在経験を伝えることによって学習者に日本について理解してもらおうと考えている様子が見られた。この日本理解、日本人理解は日中関係への意識へとつながっていた。そして、学習者に対して、広い視野を持ち、日本だけでなく、中国や世界の状況を知ってほしいと考えており、社会・文化に関して極めて広く深く捉えていることがわかった。

異文化コミュニケーション能力は、上述の日本理解と共に、日本人とコミュニケーションをする能力を養うことだと考えられるが、「日本人とコミュニケーションをする」能力とまでは述べられてはいなかった。つまり、社会・文化理解は実際に日本人とコミュニケーションをする際に直接役立つためより、日本語を学ぶ動機づけ

としてより強く意識されている様子がうかがえる。

一方、教師評価において研究業績が重視され、授業軽視という現象が生まれたとされている(王 2008)点に関しては、本調査の CT 5 名のうち、研究について言及しているのは教師 E のみで、その内容も「実践をよりよくするために研究を行う」というものであり、授業軽視の様子は見られなかった。

## 5. 今後の課題

本調査では、中国の大学で教える新人 CT 5 名のビリーフについて、PAC 分析から得られたデータをもとに考察した。そこからは、「教学大綱」の理念が、転換期以降に学習者であった新人 CT の意識にも、必ずしも反映されておらず、意識の転換が認められた部分と、転換しきれていない部分があることがわかった。本調査における教師 E が他の 4 名とは大きく異なるビリーフを持っているように、それまでに受けた教育がビリーフに影響することから、「教学大綱」の理念の中から、特に、言語運用能力や実践能力、創造能力、異文化コミュニケーション能力を目標として明確に設定した教師研修等を行うことが効果的ではないだろうか。

今回は紙幅の関係で新人 CT の分析に留めたが、坪根他(2014)の経験 CT の結果とも比較して、教授経験年数によるビリーフへの影響を探るつもりである。また、タイや韓国の調査結果との比較もする予定である。

\*本研究は、平成 21-24 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「量的・質的ビリーフ研究から海外ノンネイティブ日本語教師の研修に必要なものを探る」(研究代表者:坪根由香里、課題番号 21520549)の取り組みの一部である。

### 【補注】

- 1) 本稿ではビリーフを、教師が「言語学習の方法・効果などについて自覚的または無自覚的にもっている信念や確信」(日本語教育学会 2005、807-808)とする。
- 2) 本研究では日本語教育歴 1 年以内の大学教員という条件設定にしたため、日本に留学して学位を取得した後に帰国して職に就いたという人が多くなっている。
- 3) 本来は非類似度行列を提示すべきだが、紙幅の都合から省略した。
- 4) インタビュー時間は、1 時間 29 分～2 時間 46 分であった。また、今回の協力者は日本語能力が極めて高いと判断されたため、通訳等の特別な手当ては行わなかった。
- 5) 尖閣諸島問題によって日中関係が悪化したのは 2012 年 4 月であり、本調査はそれより前に行っている。

### 【引用・参考文献】

- 于曉渦(2002)「中国の大学における日本語教育の展開と今後のあり方について-大連外国語大学における日本語専攻カリキュラムの分析を通して-」『教育学論集』28、pp.31-42
- 王志松(2008)「転換期の大学授業:北京市 A 大学日本語学部を例として(中国人学生の授業観・教師観:国内学生と留日学生を対象に)」『RIHE』94、広島大学、pp.47-56
- 王俊紅(2012)「中国における日本語教育の異文化コミュニケーション教育の環境:-『教育大綱』の分析を通して-」『第 9 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』、pp.1-7
- 国際交流基金(2013)『海外の日本語教育の現状』くろしお出版
- 譚晶華(2004)「中国大学日本語専攻のシラバスと四、八級試験要綱について」『世界の日本語教育(日本語教育事情報告書)』7、国際交流基金、pp.47-58
- 坪根由香里・小澤伊久美・嶽肩志江(2014)「中国人経験日本語教師の『対学習者』ビリーフとその背景を探る-『いい日本語教師』に関する PAC 分析の結果から-」『大阪観光大学紀要』第 14 号、pp.59-68
- 坪根由香里・小澤伊久美・八田直美(2013)「韓国人経験日本語教師のビリーフを探る-『いい日本語教師』に関する PAC 分析の結果から-」『大阪観光大学紀要』第 13 号、pp.67-78
- 内藤哲雄(2002)『PAC 分析実施法入門 [改訂版]「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 長坂水晶・木田真理(2011)「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査-中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識-」『国際交流基金日本語教育紀要』7、pp.43-57
- 日本学生支援機構(2013)「平成 24 年度外国人留学生在籍状況調査結果」[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/data12.html](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data12.html) (2013 年 7 月 31 日)
- 日本語教育学会(2005)『新版 日本語教育事典』大修館書店
- 浜田麻里(2010)「中国人日本語教師の言語教育観に関する一考察-エピソード・インタビュー法による探求の試み-」『京都教育大学国文学会誌』36、pp.67-76
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信(2012)「熟練日本語教師の力量内容とその形成:ライフヒストリー的アプローチによる日中の日本語教師の授業スタイルの形成研究」『三重大学教育学部研究紀要』63、pp.267-273
- 冷麗敏(2005)「中国の大学における『総合日本語(精読)』に関する意識調査-学習者と教師の回答を比較して-」『日本言語文化研究会論集』創刊号、国際交流基金日本語国際センター・国立国語研究所・政策研究大学院大学、pp.59-73